

書評誌

ひろば

TAKE FREE

Vol. 214

雨
奇人変人
魔法
本棚紹介



since 1973

編集 東京大学書評誌ひろば
発行 東京大学生協書籍部
印刷 ラクスル

- 04 テーマ書評 雨
- 08 テーマ書評 奇人・変人
- 12 テーマ書評 魔法
- 14 本棚紹介
- 21 『ハマれないまま、生きてます こどもとおとなのあいだ』 栗田隆子
- 22 『か「」く「」し「」ご「」と「」』 住野よる
- 23 『せどり男爵数奇譚』 梶山季之
- 24 「ALL IS HONEY TO ALL」 日比野コレコ
- 25 『君が手にするはずだった黄金について』 小川哲
- 26 『年貢 せめぎ合う江戸時代の領主と百姓』 渡辺尚志
- 27 『明日も一日きみを見てる』 角田光代
- 28 『密やかな結晶』 小川洋子
- 30 書評誌『ひろば』×理論社80周年記念企画

読書が好き

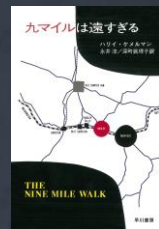
本について語りたい

大学内に居場所を作りたい

これから読書を始めたい

ひろば民募集中
公式X: @hiroba_UT
Gmail:
uthiroba@gmail.com

『九マイルは遠すぎる』ハリイ・ケメルマン 永井淳／深町眞理子 訳 早川書房



「九マイルもの道を歩くのは容易じゃない、ましてや雨の中となるとなおさらだ」という文章を読んで、皆さんはどう思うだろうか。どうもこうも、当たり前のことを言っているだけじゃないかと感じる人が大半だろう。しかし、地道に論理を積み重ねていくことでこの短い文章からは思いがけないような推論を行うことができるのだ。

例をあげると、この文章の主体は九マイル（十五キロ弱）を遠いと感じていることからスポーツマンや戸外活動家ではないはずだ。また、五や十といったキリの良い数でなくわざわざ九マイルといったからには歩いたのはほぼきっかり九マイルだと考えられる。

ここからさらに推論を続けて最終的に衝撃的な事実を明らかにする白眉の表題作に加えて、本作には隣の部屋から聞こえてきた湯沸かし器の音から推理を始める「おしゃべり湯沸かし」や、尋常でない数の指紋がついた脅迫状が届けられる「わらの男」といった、驚きと遊び心に満ちた短編が合計八編収録されている。是非手に取って論理の面白さを堪能して頂きたい。（溪）

『世界99』村田沙耶香 集英社

上下巻共に432ページと長く、読んでいて決して気分のよい小説でもない。それでも『世界99』は、人間に対する異様なまでの解像度から、これまでにないディストピアを描き出している。本作について語るとき、主人公である空子の「呼応」と「トレース」という性質や、ジエンダーをめぐる社会構造がまず目につく。しかし今回は、作中で繰り返し現れる「雨」に注目したい。終盤で再び現れる雨は鮮烈で、そこから振り返ると、物語冒頭の天気雨にも意味があり、この長い物語の構造と深く関わっているように思える。

物語の序盤、空子と白藤は雨の中で初めて出会う。二人は雨と晴れの「境界線」を発見し、空子は雨の降る白藤の側へ再び境界を越え、二人は手を繋ぐ。しかし後になってこの日のことを振り返ると、空子は雨だったと言い、白藤は「何言っているの？ あの時晴れていたよね」と答える。天気雨だったのだから、どちらも間違っていない。同じ時間を過ごしても、同じ世界が記憶されるとは限らない。ここでの雨は、単なる情景ではなく、二人の世界を隔てる「境界」として現れている。

物語の終盤で、この境界はもう一度現れる。しかし、その性質は序盤とは異なる。序盤では雨と晴れの境界は場所に存在し、空子はそれを越えて白藤の側に渡る。ところが終盤では、空子だけに雨が見え、彼女と他者とのあいだに境界が生まれる。さらに、雨の中にいた白藤へ空子が近づいたのは反対に、今度は空子が雨を見る側に立ち、白藤は「雨の向こう」にいる。最初と最後で、二人の位置は反転している。また、この反転を印象づけるように、雨粒の描写にも共通点がある。序盤では雨が「細かい引つ掻き傷」のように、終盤でも「無数の傷」のように描かれる。同じ比喩が、遠く離れた二つの雨を結びつけている。

他者に合わせ、「呼応」と「トレース」によって生きてきた空子が、最後に他者とは共有できない世界を見る。雨はその変化を可視化するために、物語の最初と最後に現れるのではないだろうか。雨は場所を分け、同じ時間を異なる記憶に分け、最後には人と人とのあいだに境界をつくる。最初と最後に降る二つの雨のあいだに、『世界99』という長い物語そのものがあるように思える。（千条）



テーマ書評

雨

ミステリ作品にはしばしば「雨」という要素が登場する。雨が降ったおかげで地面についた足跡から犯人を絞り込んだり、雨が犯人が残したわずかな証拠を洗い流してしまったりという展開は常套手段ともいえるだろう。そしてこの作品においては、「雨」が主人公たちの命を奪わんとする危険な災害として登場する。

高校生探偵の葛城はとある理由でひどく傷心し引きこもるようになってしまった。その助手の田所は彼を心配し、葛城の実家である青海館という村の中の豪勢な屋敷を訪れる。どこか怪しげな雰囲気を出し出す葛城家の面々やいまだ失意の中にいる探偵をよそに、大雨によって洪水が発生。この村全体が沈む危険性すらある超非常事態の最中、蒼海館では連続殺人が起こる。タイムリミットが迫る中、果たして事件を解決して人々を救うことができるのか……？ というのがおおまかなあらすじだ。

外部と隔絶した舞台で殺人が起こるいわゆるクローズドサークルものののだが、雨によって増水し続ける川という存在によってここに時限爆弾のような制限が加わっているのが面白いところだ。解決策を導き出さなければ全員が死ぬというハラハラが序盤から感じられることに加え、なぜこんな状況においても犯人は殺人をするのかという問いの魅力も増している。そして、このように一捻り加えられた状況においても、僅かな手がかりをもとにして鮮やかなロジックで真実が暴き出されるといってミステリの醍醐味は決して失われておらず、さらに葛城と田所の友情と再生を描く青春小説として、最後に二人がたどり着いた「理想の探偵像」の結論は胸に響く。多角的に楽しむことができる、万人におすすめしたい一冊だ。(溪)



『夕暮れの給食室と雨のプール』（『妊娠カレンダー』所収） 小川洋子 文藝春秋

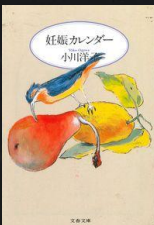
「わたし」は、引越先で出会った宗教勧誘員の男から、少年時代の記憶を聞く。男は、学校のプールでうまく泳げなかったことや、ある夕暮れに見た給食室の光景について語る。やがて男は泳げるようになったが、給食室と雨のプールの記憶は、奇妙な印象を残し続けていた。

特に印象的なのは、給食室の描写だ。私たちに与って給食とは、決められた量が整然と配膳される、秩序だった食事である。しかし本作では、「シャベルでかき回されるシチュー」「黒いゴム長靴で踏み潰されるじゃがいも」と、給食が過度に物質的に、グロテスクなほど生々しく描かれる。そこには、普段私たちが見ている「給食」と、それを生み出す「給食室」との大きな隔たりがある。

同じことがプールにも言える。プールは子どもたちが楽しそうに泳ぐ場所である一方、泳ぎが不得意だった男にとって、雨の降るプールは疎外感と不気味さを帯びた場所だった。しかし彼は、いつの間にか泳げるようになる。学校に馴染めなかった経験が、その後の人生に深い影を落とす物語は多い。しかしこの作品の主眼は「自分が馴染めなかったこと」そのものではなく、むしろ、給食室やプールというありふれた日常の風景と、その奇妙さである。

給食室がなければ給食はなく、プールにだって雨は降る。どちらも決して非日常ではない。それなのに、小川洋子というフィルタを通して、見慣れたものが突然、不可解で生々しいものとして立ち現れる。これを読んだ後では、私はなぜ給食やプールを、これほど当たり前のものとして受け入れていたのだろうと思わされる。

この作品で描かれるのは非日常の恐怖ではない。私たちが毎日見ていたはずの日常を、一枚のフィルタ越しに覗き込む。そのとき初めて見えてくる、日常に貼りついた不気味さ。このさりげない恐ろしさこそ、本作の魅力なのだと思う。(權)



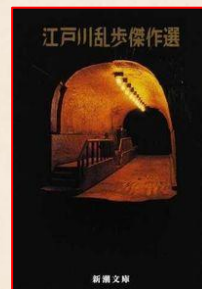
テーマ書評 奇人・変人

『江戸川乱歩傑作選』 江戸川乱歩 新潮社

江戸川乱歩は名探偵明智小五郎が登場する作品をはじめとして極めて優れたミステリを数多く発表しているが、その中にはいわゆる奇人が登場し、倒錯的なフエティシズムが押し出された短編も多い。タイトルにたがわぬ傑作ぞろいの本短編集にもそのような趣向の作品はいくつかみられる。

「鏡地獄」では鏡に魅入られてしまった一人の男の生き様が描かれる。初めは不思議な性質を持つ鏡に興味を持つ程度だったのが、どんどんその虜になっていつてしまい最終的には想像するだけで未恐ろしい光景を目にするようになる。「人間椅子」は椅子の中にすっぽりとおさまって生活をしている男の独白による物語だ。当初は盗みを働くための隠れ家として椅子を活用していた男が、数多の人に「座られる」体験を通じてそのこと自体に多大なる興奮を覚えるようになる過程が臨場感たつぷりに語られる。「屋根裏の散歩者」は主人公が屋根裏を移動し小さな穴から隣人の振る舞いの観察をすることを趣味とし、出来心である完全犯罪を思いついて実行を目論むというスリリングな作品である。

乱歩の優れたところは、巧みなる筆致によってこれらの奇人じみた所業とそれがもたらす興奮をリアルに描写し、読者にもその感覚を味合わせる点である。万人が持つ仄暗い欲求を描くことで、まづことなき変人であるはずの登場人物たちにも読者が共感できてしまうからこそ、唯一無二の読書体験となるのだ。(溪)



『Los nombres de Feliza / 「フェリーサの名前」』
Juan Gabriel Vásquez Alfaguara

小説の世界に奇人変人は数多けれど、これほど芯が強く、魅力があり、周囲に人の集まる奇人変人はそういないに違いない。そう、本作の主人公、フェリーサ・ブルスツインのことである。

本作は、コロンビアの人気作家、フアン・ガブリエル・バスケスの(二〇二六年現在)最新作である。コロンビアの実在の彫刻家、フェリーサ・ブルスツインの生涯を描く、事実を基にした小説だ。フェリーサは、その波乱に満ちた生涯と同じくらい奔放な人物で、その芯の強さと人間的な魅力に惹かれ、周囲には友人たちが集う。その悲劇的な死は小説の最序盤で明かされるが、その場面向かって合流していく小説のストーリーを読み進めるうちに、読者もまた、この強烈な個性を持つ主人公に魅了されていくことになる。

二〇二五年に出版されたばかりのこの小説は、まだ日本語訳がない。Anne McLeanによる英語訳『All the Names of Feliza』が来年(二〇二七年)に出版される。そのようなので、英語に自信がある人はそちらを手にとるとよいだろう。日本語版の出版も待たれるところである。(塔)

『うたうおばけ』くどいれいん 講談社

人生は出会いと別れの連続だ。日々さまざまな人の人生とすれ違う。他者とかかわるといふことは不思議の連続だ。本人はいたって大真面目でも、その生きざまは他の人にとっては驚きの連続だ。本書は、歌人で小説家のくどいれいんによるエッセイだ。さまざま「ともだち」の、小さな驚きに満ちた日々が、断章の形式で綴られる。ここに登場する実在の人々は、ミステリー小説やサスペンス小説に出てくるような奇人変人ともくれば、いたって普通の人だ。それでも、人生の「一瞬一瞬」を取り出せば、そこには不思議や驚きがたくさん隠れている。奇人変人というのは、なにもフィクションの専売特許ではない。普通の人の普通の生活の中できらりと光る一瞬をあざやかに取り出す作家の魔法にかかれれば、どんな人でも波乱万丈の人生を生きる旅人になる。

頭から足の先までぜんぶ普通、なんていう人間はどこにもいない。このエッセイは、どんな人間のどんな人生にも必ず潜んでいる不思議や驚きありのままに描き出す。自分のことを普通で取り柄がない、と思っているような人にこそ、本書を手にとってもらいたい。最後のページを読み終わって顔を上げたとき、そこにある人生の景色は、それまでよりほんの少しだけ、輝いて見えるに違いない。(塔)



『コズミック 世紀末探偵神話 新装版』清涼院流水 星海社

数ある職業の中で、一番変人として書かれることが多いのは探偵ではないだろうか。突然部屋にこもったかと思えば高らかに笑いながら出て来るシャーロック・ホームズ、飄々としていて突然頭をボリボリとかきむしる金田一耕助と、超有名な探偵たちはどこか特徴的で常人離れたクセとともに描かれていることが多い。そして、数あるミステリの中でも指折りの奇人つづりを発揮する探偵たちが大量に登場するのが本作『コズミック』である。

物語は「今年、12000個の密室で12000人が殺される。誰にも止めることはできない」としたためられた犯罪予告状が「密室卿」を名乗る人物から届けられたところから幕を開ける。やがて本当に数々の密室殺人が起り始め、「密室卿」の正体を突き止めるべく日本探偵倶楽部(JDC)が誇る探偵の面々が立ち上がるのだが、このJDCが魑魅魍魎が跋扈する奇人の巣窟なのである。

例えば、JDC所属のピラミッド・水野は絶対に推理の核心を外してしまう迷探偵だ。それでは真相に辿り着けないと思うかもしれないが、逆に言えばピラミッド・水野が披露した推理は100%間違っているため、その可能性は完全に消去できるのである。通常の探偵とはいわば完全に逆なのに、探偵として成立してしまうのが可笑しいところだ。他にも収集したデータから統計と分析を行う氷姫宮幽弥、女の勘を根拠に推理を繰り広げる九十九音夢、飲酒や睡眠による潜在意識下において天啓を待つ天城漂馬など、バラエティが豊かすぎる探偵の面々が次々と登場する。

「本格ミステリ史上、最もバッシングを受けた」という公式の紹介が示す通り、キャラも真相もおふざけに満ちたものであり真面目に読むことは推奨しないが、独特すぎる世界観と風変わりな探偵たちが唯一無二の読書体験をもたらしてくれるのは間違いない。(溪)

『薬指の標本』小川洋子 新潮社

本作品は表題作「薬指の標本」と「六角形の小部屋」という二篇で構成されている。いずれも、なんとも不思議な雰囲気を持つ作品である。ともすれば「博士の愛した数式」がクローズアップされがちな小川洋子だが、『妊娠カレンダー』や本作のような、ちよっぴり現実離れしていて、でもどこか親しみのあるような作品が彼女のもうひとつの真骨頂と言えるだろう。

「薬指の標本」に登場する奇人変人は標本屋で働く二人である。標本と言われて皆さんがイメージするのは、大抵の場合、植物や動物だろうが、本作品の標本屋はあらゆるものを標本にしようとする。例えば、ある人が愛した音楽であったり、顔にできてしまった火傷の跡であったりだ。そんなものを主人公の女性の女性が受付し、技師の男性が標本にする。こんな奇妙なやり取りが日々行われている。標本屋が舞台の作品である。ただ、作品の冒頭では二人のやつていることの異常性はあまり浮かび上がってこない。あまりにそれが当然かのように話が進むからだ。タイトルにもある通り、「薬指」を標本にする、というあたりから二人の異常性が際立ち始め、密閉された浴室にてふたりの愛情が深まっていくことと相まって、奇妙な読後感を与えることとなる。ともあれ、文章はとても綺麗で、読みやすい作品なので、ぜひ一度は手に取って欲しい作品である。(わ)

『改良』遠野遙 河出書房新社

変人には二種類ある。一つは理性の欠如。この場合は簡単で、公的な福祉なりなんなりで保護すればよい。さらに一つは理性の極致である。この場合は難しい。それが変人であると主張するためには、高度な言語化能力を必要とするからである。遠野氏の著作には、上記後者のような「変人」が、多くは主人公として登場する。多くの読者は一読して「何か変だな」という印象を受けるであろうが、ではどこが変かと考えればこれを言葉に出して言うのが非常に難しい。それゆえに「変だな」という印象を増幅するのである。私はここで、「変だな」という理由よりもまず、「変だな」と思ってもなぜそれを説明しきれないのか考えてみたいと思う。要するにそれは、主人公が行動するたびにその行動に説明を付し、納得しながら行動しているからではないかと、私は思う。理由とそれによって合理化される行動が本筋に論理に適合するかはともかく、形式的な論理は満たしているという点で、「変だ」と主張しきれないのである。ではなにが「変だ」と感じる原因か。これを考える楽しみは本書の読者に残しておくとして。(穴党)



魔法



『土人形と動死体』 円城塔 早川書房

魔法は時として、小説内において所与のものとして扱われる。しかし、本作では魔法や異種族の存在を認めた上で、それらの成り立ちや動力源といった魔法が成り立つための論理について徹底的な解体が行われ、他に類を見ない世界観が形成されている。

物語の軸となるのは大魔術師ノーシュ・アレグラである。彼女はスケルトンを動力に、スライムを神経に用いてゴースト・マシンを開発していたが、ある時大魔術により迷宮と化した迷宮に閉じこもってしまう。どうやらその理由は、魔法が使えない「ソウルレス」としてぞんざいな扱いを受けている弟子のエスノダのために、世界から魔術を消し去るためらしい……というのが最初の流れだ。

強大な力を持つ魔王、長命種で世界を常に見つめる双頭の竜、異世界を垣間見るレンズといった世界を構成する様々な要素を扱った各短編において、この奇妙な魔法世界を支配する論理とノーシュが世界に対して挑んだ戦いのヴェールが少しずつはがされていく。そして辿り着く最果ての景色を、ぜひその目でみてほしい。(溪)

『四畳半神話大系』 森見登美彦 KADOKAWA

森見を勧められたのは、かつてこのサークルにいた先輩からだ。彼は森見を溺愛しており、森見の講演を聞きに行くために、京都大学の学祭に出向くほどだった。なんとなく思い立った私は「夜は短し歩けよ乙女」から手に取り、3作ほど森見の作品を読んでみた。正直に言って、ファンタジー色が強すぎる森見の作品は私には刺さらなかったが、しかし、関西出身の私は京都に何度も行ったことがあり、森見の京都の描写には何か光るものを感じたのであった。東京とは違う、あの町特有の雰囲気、確かに森見の作品には底流している。そして、その空気が森見の作品、ひいてはあの「魔法」的な世界観を形作っているといっても過言ではないだろう。

そして、今回紹介する『四畳半神話大系』はある男性が4つのサークルにそれぞれ入っていたらどうなっていたかを描くパラレルワールドものである。全く同じ文章が4つの章で反復される様子などは、斬新でありつつ、パラレルであることを示すためにはとても効果的であると感じられた。

森見の作品は奥が深い。そういえば、私は村上春樹も最初は嫌々読んでいたが、気づけば虜になってしまっていた。森見もそうなりそう、少し怖く、少し楽しみである。(わ)

テーマ書評

『呪文の言語学 ルーミアニアの魔女に耳をすませて』 角悠介 作品社

ルーミアニアでは時折、片耳に綿を詰めた人に出会うことがあるという。なぜならルーミアニアには「クレント」があるからだ。クレントとはルーミアニア語で、「水や空気などの流れ」を指す。片方の耳に綿を詰めることで、頭の中でクレントが発生するのを防ぎ、病氣から身を守るができるのだという。この風習を非科学的だと笑うことは簡単だ。しかし本書は、ともすれば迷信として片付けられがちな呪術に、その圧倒的な言語学的知識を武器にまっすぐ向き合っている。言語学者である著者が扱うのは呪文だ。著者はまず、現代の呪文の背景についてしっかりと解説する。この部分だけでもかなりの読みごたえがあるが、言語学者である著者の真骨頂はこの後の呪文の分析だ。著者は大量の呪文を丁寧に分析し、隠された構造を暴き出す。初めはまったく無秩序に見えた呪文の数々が、著者の導きによつて意味を持つものとして見えてきた時の感慨はひとしおだ。

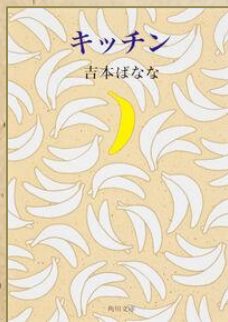
また著者の博学多才さも目を見張るものがある。多言語を操る著者はその知識を用いて、不可解な呪文の由来を解き明かしてみせる。読者はその鮮やかさに驚くと同時に、呪文が辿った長い歴史にも思いを馳せることができる。タイトルこそ『呪文の言語学』だが、本書の魅力は呪文の分析に留まらない。本書はルーミアニアを舞台に、一見非科学的な魔術の背後に広がる、豊かな言語と文化の世界を垣間見せてくれるのである。(權)

『ムーンライト・シャドウ』(『キッチン』所収) 吉本ばなな KADOKAWA

「私には「等」という恋人がいたが、彼は事故に遭ってしまい、亡くなってしまった。そんな「私は寂しさを埋めるために毎日ジョギングをしている。そこで出会った「うらら」という不思議な人物がまさに「魔法」とでも呼ぶべき体験を「私」に魅せてくれる。その「魔法」は月夜において魅せられる。この描写が美しく、見事だ。

これだけのあらすじを紹介しただけで、勘のいい読者の方はこの作品において起きる「魔法」を予想してしまうのではないかと。ただ、とりあえず読んでみて欲しい。短編なのでそれほど時間もかからない。また、本作はかの有名な「キッチン」に併録されている。恥ずかしながら、つい先日初めて吉本ばななに触れたのだが、心がほんわかなる作品で個人的には気に入った。

「うらら」が見せてくれるものを「魔法」と呼んだが、あるいは「魔法」とは、「私」が周りの人物に助けられながら傷心を癒していく様を言ってもいいのかもしれない。人と人との関係は不思議なものである。(わ)



本棚紹介

本棚を見ればその人のことが全てわかる……とまでは言わないものの、本棚が持ち主自身の人となりや色濃く反映していることは間違いないでしょう。

今回は新たにひろば民となった新入生6人に、自由にテーマを決めて自分の本棚から数冊紹介してもらいました。選んだ本のジャンルも、選んだ理由もさまざまです。個性豊かな本棚をご覧ください。

読み返したい本棚

上京するにあたって、私は読んだことのある本は実家に置いていくことにした。それでも、持ってきた本が3冊だけある。『星の王子さま』、『アルジャーノンに花束を』、『嫌われる勇気』である。どれも有名な本なので読んだことがある人が多いだろう。今更、紹介するのも恥ずかしいが、これを機会に、読み返してみたい。



『星の王子さま』 サン＝テグジュペリ 河野万里子訳 新潮社

砂漠に不時着した「僕」の前に小さな王子さまが現れる。いくつもの星を巡って地球にたどり着いた王子さまの話。

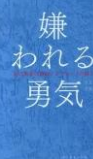
読むたびに意味が変わるような本で、日々に忙殺される中で忘れていた大切なことに気づかされる。また読みたい日が来ると思って上京する時も持ってきた。そして、この本はなぜか他の本にやたらと出てくる。それだけ人気が高いだろうが、物語の中で本が出てきたと思ったら『星の王子さま』だった、なんてことがよくある。同じものを読んだことがあるというだけで小説の世界が広がるので、読んだことのない人はぜひ読んで欲しい。読んだことのある人はぜひ読み返して欲しい。

『アルジャーノンに花束を』 ダニエル・キイス 小尾芙佐訳 早川書房



知的障害を持つ青年チャールイは脳手術で天才的知能を得るも、再び知能が衰退していく。その苦悩や葛藤を描いたSF小説。チャールイの人生を通して、知的障害を持つ人、天才、その両方の苦悩を私たちは見る。そのひたむきな様子にただただ感動していたのを覚えている。読んでいる間ずっと心を揺さぶられ続けるような本だと思う。とにかく泣きたい時に読み返す一冊。

『嫌われる勇気』 岸見一郎・古賀史健 ダイアモンド社



アドラー心理学を日本に紹介した一冊。心理学というが、むしろ哲学に接続するような、シンプルな生き方のヒントをもらえる本。私はこの本を読み、内容を曲解することで性格が捻くれたと思っている。この本に書かれた内容を実践することは、難しいと思うが、自分と他人の責任を分けることだけでも覚えておいてほしい大事な教えた。(薦)

ひろば民の本棚



『君の話』と本棚

最近、『君の話』の実写映画化と、2年ぶりの新刊『かがみよかがみ』が発表され、久しぶりに三秋縋の話をしたくなった。そこで、私が一番好きな作品である『君の話』をより楽しむために、本棚から3冊を紹介したい。三秋縋の世界観に慣れる一冊、青春コンプレックスを植え付ける一冊、そして『君の話』そのものの三冊である。



『三日間の幸福』三秋縋 KADOKAWA

三秋縋は少しクセのある作家なので、『君の話』を違和感なく読むために、まず1冊読んでおきたい。知名度と読みやすさ、エンタメ性を考えると、この作品が一番いいだろう。

私は三秋縋作品の特徴を、空に押し潰されるような閉塞感と微かな救いだと思っているが、この作品ではその両方をシンプルな物語の中で存分に味わうことができる。また、そのシンプルさゆえに、他の作品にも通じる三秋縋らしさがかなり分かりやすい。主人公が大学生で、私も入学してから数ヶ月が経ち、今に飽き始めているので、そろそろ再読しようと思う。

『夜のピクニック』恩田陸 新潮社

80キロ歩く高校生活最後のイベント「歩行祭」での出来事についての話。この説明だけ聞くと地味に



感じるだろうし、実際その通りなのだが、登場人物たちの心理描写が絶妙で、青春小説として抜群に面白い。私はこの本を初めて読んだとき、自分の高校に歩行祭がなかったことに苛立ちを覚えた。それほどまでに彼らの青春は眩しく見える。ほとんどの人は高校時代に80キロを歩くイベントに参加していないはずなので、この本を読めば青春コンプレックスを植え付けられる。そして、この感覚を持ったまま『君の話』を読むと、より楽しめると思う。



『君の話』三秋縋 早川書房

「一度も会ったことのない幼馴染がいる。」という一文から始まる三秋縋の最高傑作である。どれほど恋愛に後ろ向きな人でもこの主人公と同じような状況に置かれたならば、恋してしまうだろう。三秋縋の作品には、自分のための物語だと思わせる力があるから尚更だ。

この作品は設定だけでなく、構成もまた魅力的である。青春コンプレックス、現実と虚構というテーマを対比の連続で描き、その見せ方がとにかくうまい。私のお気に入り、レコードを聴いている場面の最後に挿入される「物語はここからB面に移行する」という一文。この一文の置かれ方がとにかく好きだ。

他にも完成度が高い作品はあるが、それでも私にとって『君の話』が最高傑作である。設定は複雑なのに、物語の中心にあるものは意外なほど単純で、その点では『三日間の幸福』ともよく似ている。このシンプルさこそ、三秋縋の作品の魅力が最も強く表れている部分だと思う。(千条)

ひろば民の本棚

喜怒哀楽と共にある本棚

背表紙から本を決める私は、読書傾向を他の方のように特定の作家やジャンルで表すことができない。ここでは、小学生から大学生にかけて読んだ本の中で、悩みや痛みに真つ直ぐに向き合っていると感じた本を三冊紹介したいと思う。



『自閉症の僕が跳びはねる理由』東田直樹 KADOKAWA

小学生の時に読んだ、印象深い本である。重い障害を抱える筆者が、自らが経験してきた苦しみと共に、自閉症当事者から見える世界を描き出す。「みんなが当たり前のようになつていくことが、僕には信じられないくらい難しいことだった」と筆者は明かす。自分の存在意義を見失いそうになる経験と、世界の異なる見え方から感じる喜びが丁寧に綴られている。どんなマインリティ性であっても、当事者に言葉で経験を伝えることの難しさは言うまでもないであろう。その困難を乗り越え、世界30か国以上で翻訳されたこの名著を、手に取ってみてはどうだろうか。



『ラスト・フレンズ わたしたちの最後の13日間』ヤスミン・ラーマン 代田亜香子 静山社

中学1年生の時に初読。自殺パートナーのマッチングサイトで出会った三人の少女たちは、二週間後の「終末の日」まで共同

で遺書の作成などを遂行するようサイトから命じられる。異なる悩みを持つ彼女たちは、二週間という短い時間を過ごす中で、互いを知り、友情をも育んでいく。作者は、自分が十代の時に読みたかった本を書きたかったと述べているが、自分の経験を掘り起こすことにも、それを踏まえて物語を紡ぎ出すことにも、大きな痛みが伴ったのではないかと想像するに難くない。しかし、三人の少女が、互いを慰めようとして慰めるのではなく、等身大で向き合つて愛をもたらし合う姿に、読者は脆くはあれど希望を見出すのではないか。



『答えは風のなか』重松清 新潮社

小中学生の時、図書館の本棚の片つ端から読み漁った重松氏の作品を再読したいと思い、大学生になつてから手に取った一冊である。作者があとがきで述べていたように、この本には、「ああでもない、こつでもない」が詰まっている。時代が変わり、価値観も変わり、答えが揺らぐ今、子どもたちはこのように苦悩しているのではないか。子どもの繊細な心に寄り添い、教科書的な答えを出そうとは一切しない点、作者の著作の魅力である。どの考え方も正解にはならないようだけれど、悩みながら次の一歩を決めていく、そんな子どもたちが描かれている。「カレライス」など教科書掲載作品でも有名な重松氏だが、大学生や社会人になつてから再読するとまた異なる味わいがあるだろう。(硯)

ひろば民の本棚

ひろば民の本棚

自分はいわゆる純文学(以下純文学といえれば現代のいわゆる純文学を指したい)をもっぱら読んでるので、文芸誌をよく読む。駒場の図書館の1階のラウンジに直近1年分の各種文芸誌が置かれていて、バックナンバーも地下2階に大量に置かれているのでよく読みに行くが、借りることはできず図書館内で読む以外に選択肢がないので僕のメインの読書時間である移動時間(自分は通学に90分かけている)に読むということができず、また自分は駒場の図書館が勉強をする場所として最適化されすぎていて読書という目的が周辺化されているように感じあまり心地よいものではないと思っているというのもあり、本当に読みたい作品があるときは書店で文芸誌(あるいは単行本や文庫本を購入する。一度『文藝』を定期購入しようかと思っただけでもあったが全て読める気がしないかつ文芸誌ばかり読んでいたらまだ浅い古典を読む時間が無くなると考えて思いとどまった。

『文藝 2026年春季号』 河出書房新社

この号は好きな作家2人の短編が入っていたので購入した。ここでは作品の魅力というより文芸誌の魅力を語りたい。

まず文芸誌には僕の好きないわゆる純文学というジャンルに分類される作品がたくさん載っている。純文学というジャンルの定義は曖昧であるが、ある人がX(Xing)で「純文学は文芸誌に載っている作品だ」と言っている、形式的にいちばんわかりやすい定義といえればそれなのかもしれない。そして、例えば今回僕は元から好き

だった作家の作品を読むために『文藝』を購入したが、その他にもたくさん作品が載っているのである。今回で言えば松田いりりの『ハッピー山』はぶっ飛びすぎて話題になっていたし、八木詠美『アンチ・グッドモニング』は2026年上半年期の芥川賞候補に選出された。どちらも僕がおそらく自分から文庫本や単行本を買ったことはなかった作家(というかまだ売れていない作家が文芸誌に載る)なので、1冊買うだけでこれだけ面白いいろいろなものと出会えるのは魅力である。

さらに「いろいろなもの」と言ったが、それは純文学に限らない。例えば今回では特集「うたのことば」に「ハン・ガンを読む」が組まれていて、若き歌人である瀬戸夏子と青松輝が現代短歌史を俯瞰する対談があったり、テーマに関する様々なエッセイや論考が掲載されていたり、ノーベル文学賞を受賞したハン・ガン作品とそれに関する座談会や書評が多く載っていたりして、自分が短歌や詩、ハン・ガン作品に興味をもつきっかけとなった。また一話完結の連載であるというせいこ「難民移民モノローグ」という日本に住む難民や移民の半生をインタビューしたものをモノローグとして書き上げたノンフィクション作品もあり、ロビンギヤ難民の生き方に非常に感銘を受けたりもした。

このように自分にとって新しいものを多く供給してくれる文芸誌はとても面白いのでぜひみなさんも(想)

ライトな本棚

私の本棚に入っている本は大衆小説がメインで、しかも冊数はそれほど多くない。純文学愛する人が見れば顔をしかめそうなラインナップだが、しかし私がある時点でこれは面白いと思った本が選ばれており、その一つ一つが私自身の成長の過程を表している。そこでここでは私が読んだ順に特に推している三冊を紹介しよう。

『ツナグ』辻村深月 新潮社

小学生高学年から高校生前半にかけて読み漁った辻村深月氏の作品のうち、私が最初に読んだのがこの『ツナグ』である。生者の依頼に応じて死んだ人間と生きた人間を会わせる窓口、使者を軸に、死者と生者の交流が生きて生きと描かれる。死者とどう向き合うかというありふれたテーマながら、多様な背景を持つ主人公たちと、一度しか、そして一人しか会えないという機会の希少性が物語を鋭く鮮やかなものにしていく。「死者はだれのために存在するのか?」「使者はどこまで介入すべきなのか?」といった興味深いテーマが平易な文体で提示されるので、死についてちよつと考えてみたいという人にも是非読んでもらいたい。



『麦本三歩の好きなもの』住野よる 幻冬舎
住野よる氏の作品は高校一年生に読み始めたが、ここにはあまり世の高校生に人気がないものを紹介する。ドジで、おつちよこちよいで、職場では先輩に怒られ、よく食

べ、歩くのが好き。そんなちよつと変わっているけど普通の主人公、麦本三歩が泣いたり怒ったりしながら楽しく生きる様子を描いたのがこの連作短編集のシリーズだ。かといってこの物語が平凡でつまらないわけではない。緩く特徴的な語り手の言葉とともに描かれる、「怖い先輩」「麗しき友人」といった、愉快な周囲の人物たちとの軽快だが時に心に響くやり取りや、等身大でどこか親近感を覚える三歩の心中は、読み手の視点をぐつと主人公に近づける。各編にはしつかりテーマが用意されているが、どれも軽くさらつと読める内容なので、最近あまり本を読んでいない人もリハビリにどうだろうか。



『プラハの古本屋』千野栄一 中央公論新社

最近になって新版が出て本屋に並んでいたのを手に取り、最初の一編を読んでぐつと惹かれたので衝動買いした本である。何となく縁遠く感じる冷戦下の東欧の意外にも人情あふれる様子が、チェコ語を研究対象とする言語学者の著者の、学者っぽくも愉快な文体で紹介されるエッセイ集だ。言語学者によるバイリンガルの育て方や、共産圏での古本の独特な探し方など、ここでしか読めないようなエピソードも多く、言語や文化に興味のある方は間違いなく引き込まれる。同じく冷戦終結前後のプラハを描いた『ビールと古本のプラハ』はチェコのビールの話を中心に冷戦終結後のチェコの古本事情の変化について書かれており、こちらもおすすめです。(瑞穂)

ひろば民の本棚

中学時代の本棚

小学一年の分から遡り、一年に一冊、自分の中で、『本乃大賞』というものを決めていきます。その年面白かった本から数冊ノミネートし一番を決める、いわば『本屋大賞』のことです。その記録から、中学時代の私が選んだ三冊を紹介します。



・中学一年生

『鳥にだけは似合わない』阿部智里 文藝春秋

世界観に圧倒されました。人間と八咫鳥、二つの姿を持つ者たちが暮らす異界の妃選びを巡る第一話。妃候補を出す四家にそれぞれ特色があったり、身分差が丁寧に描き分けられていたり、情報量の多さとディテールの凝り方は、ハイ・ファンタジーの醍醐味です。このシリーズが好き、という人は多いので、結構誰とでも盛り上げられるのが嬉しいですね。近習・雪哉を主人公とした二作目以降も大好きです。

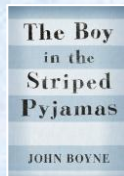


・中学二年生

『新世界より』貴志祐介 講談社

人生で一番好きな本は、と聞かれたら、この一冊の名を挙げることにしています。読後一年間、余韻が抜けませんでした。舞台は千年後の日本、人がみな念動力を持つ時代。はじめは長閑な子ども時代が描かれますが、なじみ深い動物の名に交じってカヤノスツクリやフクロウシと言った、知らない生き物が出てきた

り、「全人学級」を卒業できない子どもが皆に忘れられていたり、少しづつ違和感が増していくのが楽しくて仕方ありません。世界の秘密が明かされる瞬間の怒涛の興奮は、何にも代えがたいことでしょう。『偽りの神に抗え』とキャッチコピーを銘打って、アニメ化もされています。



・中学三年生

The Boy in the Striped Pyjamas

John Boyne

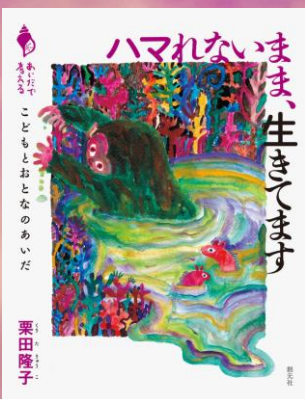
およそ二年をかけて読み切った、人生初めての洋書です。時は第二次世界大戦、ナチス将校の父を持つ少年・ブルーノが、引越した先の裏庭で出会った、フエンズの向こうの縞模様のパジャマを着た男の子。世界の恐ろしさを知らないまま、ブルーノは無邪気に仲を深めていくけれど、という話。子ども向けの平たい言葉で書かれていて、日本語でも英語でも読みやすいものの、その中身はアイスピックのように鋭利に、ホロコーストを知る大人たちだけを差し貫きます。とつても偉いソートー様、毎日決まった時間上がる煙。ブルーノが無垢な瞳で見つめる日常が、裏側を知る私たちには、悲しくて恐ろしくてたまらないのです。

以上、中学時代の私が選ぶ『本乃大賞』でした。各年のノミネート作には『黒い郵便船』すつとお城で暮らしている『ピラミッド帽子』、さようなら『師匠シリーズ』『本好きの下克上』などがあり、いずれもとびきりの一押し本です。大学四年間では、どんな本に出会えるのでしょうか、今から楽しみです。(筆)

ひろば民の本棚

『ハマれないまま、生きてます』子どもとおとなのあいだ

栗田隆子 創元社



昔から、本屋の自己啓発本や臨床心理学の本を彷徨つては、どうにも腑に落ちずに立ち去るということを繰り返してきた。この本は心理学、社会学、精神医学のどれを詳細に扱ったわけでもないのだが、幼いころから「ハマれない」経験がこれほど赤裸々に綴られている本には初めて出会った。

自分の中で自分を、または「感情」と呼ばれるものを表現する術を持たなければ、世界への適応を迫られ、差し当たり世間の「〇〇らしさ」に自分を近づけてしまつことがある。日常とされる世界自体が暴力的ならば、そもそも暴力を受けていることに気付かえないのである。気付いていても表現の上では、自分の違和感を違和感を覚えない者や暴力を振るっている者たちが作ってきた既存の「言葉」に翻訳するかのようにして、呼吸の不自由な世界で溺れながら、途切れ途切れの言葉を発するしかない。そのような状況の中で、ハマれていると思う子どもに向けてもそう思えない子どもに向けても言葉を紡いだ筆者に敬慕の情を禁じ得ない。

幼い頃の孤独や恥の気持ち「子ども」という言葉から想起される無邪気さや自由さを凌駕し、今の自分さえ蝕み続ける。そのような経験をしている人々が、読者の中にもいるかもしれない。その多寡は問題ではない。著者は最後に、過去の思いもハマれない現実も静かに抱きしめたいという思いを綴る。拙稿筆者は、この書評を人生論に帰着させずに、著者のあるがままの言葉を読者にそつと手渡したいと思う。(硯)

自分にちよつと人の心がわかる能力があれば、もう少し器用に生きられるんじゃないか。この文章を読んでいる人も一度はそんなことを考えたことがあるだろう。本書はそんなテーマについて書かれた小説である。

どこにでもいそうな青春を謳歌している高校生五人は、全員人の気持ちを理解するのにちよつとだけ役に立つ能力を持っていて、それを使ってお互いに隠している何かを探る。しかし、彼らは自分が持っている能力に逆に振り回され、空回りしてしまう。それでも悩みを解決するために誰かに相談し、一歩踏み出していく。そのうち何を隠していたかがだんだん明らかになり、最後にはちゃんとハッピーエンドが待っている。そうしたことが続く中で五人は親密になっていき、最後には互いに大切な存在になっているのだ。

さて、この小説の大きな特徴は、五人の持つっているちよつと特別な能力である。それらはもし自分が持つていれば人の感情のかけらがわかる、ちよつと役に立つ能力だ。しかし、もしこつとした能力を持つていたとしても、すべてがうまくいくわけではない。主人公たちは能力で問題をパツと解決できるわけでもなく、結局は特別な能力を持たないちよつとばけな私達と同じように悩み、失敗する。それでも彼らは自分なりに悩みながらどうにか乗り越えていくのである。本作は普通に悩んで生きることの楽しさや面白さが鮮やかに描かれているのだ。(瑞穂)

『せどり男爵数奇譚』

梶山季之 筑摩書房

サッカー少年のために書かれたテクニク教本や、ビジネスパーソンのための実用書と違って、物語はたいいてい、今を生きるすべての人に扉を開いています。しかし中には、本好きによる本好きのための物語というのも存在するものです。そのうちの一冊が、この『せどり男爵数奇譚』。これは、寝食を忘れてページを捲る体に満ちた心地よい興奮を知り、絶版本一冊を探してありとあらゆる図書館と古本屋を巡り、二百円のお菓子は買い流るのに一万円の稀覯本には手を伸ばす、そんな私たち書痴(ビブリオマニア)の胸の中心を射止める、特別な物語です。

せどり男爵とは、主人公が出会った、「背どり」を生業にする古本屋の通称です。彼らは戦後の混乱に紛れて名家の蔵から売りに出された貴重な古書を求めて、古本市の「背」表紙を値踏みしては、なかなかあくどく「取り」集めます。永井荷風の『くらんす物語』など、実際に存在する本が出てきて、そのたびにわくわくと心が躍ります。連作短編形式で綴られる、男爵と古書をめぐる六種六様の事件。収集に情熱を燃やす本狂いたちの姿には、共感すること、そこまではるかどきすがに驚かされることも。活字離れが叫ばれる今、彼らのような人たちはどこへ行ってしまったのでしょうか。『せどり男爵数奇譚』は、消えてしまった同志に出会えたような気持ちで、高校時代、大切に読んでいた一冊です。読んだらあなたも神保町に行きたくなること、間違いなしです。(筆)

「この作品はほんとうの意味で美しい『恋愛小説』だと思う。

美しい恋愛といえは一途で一所懸命なものを思い浮かべるだろうが、この作品で描かれているのは男女の垣根を超えた人間愛である。登場人物の菜葉(ぐみ)は「歩くだけで、話すだけで、たくさんの人に好かれ」る人であり、主人公のしゅづき(漢字で名前が出てこない)を含めいろいろな人に愛を振りまいている(その点で菜葉は「たえない光の足し算」のハグとも通ずる)。恋人らしき人はいるがマチアプで電話も続け、異性同性がまわらず愛する。この作品を読んで、サルトルとボーヴォワールが「偶然の関係」としてお互い以外のパートナーを持つことを了承する関係であったことを思い出し、通ずるところがあるのではないかと思った。

そうは言っても「恋人らしき人」である六への気持ちは特別である。スティルツを履いて身長三メートルの人間として生活する六を好いている菜葉は、元は身長が低かった六のために自分の身長が縮むような逆シークレットシューズを夢想した。寝ている間ですら六がスティルツを脱ぐことはないが、菜葉もまた六がスティルツを脱ぐことを許さない。スティルツを履くのは菜葉よりも身長が低い六の単なるコンプレックスではなく、身長が世界で一番高いことを望む菜葉への忠誠である。そんな六を建築学科であるしゅづきは尖塔に喩えるが、その地盤は菜葉の呪いであろうか。六を人間ではなく建築物として扱い、最後には六は、しゅづきに気を逸らしていた菜葉の前で、しゅづきに会ったためのものとして使われたスティルツを脱ぐことができたが、結局は菜葉の圧倒的な魅力の前に誰も有意に盾突くことはできなかった。

「どの唇もあらゆる唇に触れることができ、人間はキスにおいて平等である」から、しゅづきはキスなどの行為に特別さを感じない。だから登場人物たちはもつと特別な方法で愛を表現する。人間は愛し合えるように設計されているが、作品中の様々なモチーフのように世界は少しずつ誤用され、人間の設計も誤用される。特に最後の場面は一文一文すべてが美しい。(想)

『君が手にするはずだった黄金について』 小川哲 新潮社



エントリーシートの「あなたの人生を円グラフで表現してください」という問いをきっかけに、主人公は自分という固有名について考え始める。そして、自分を記述することについて考え、恋人とのやりとりの中で小説を書くことへと辿り着く。その主人公は「小川」という名前を持ち、経歴も意図的に作者自身と重ねられている。

プロローグでは、自分とは何か、創作とは何かという問いと、主人公なりの小説の書き方が提示される。その後の短編でも、記憶や真偽、虚飾といった題材を用いながら、現実と虚構の関係が繰り返し描かれていく。

信頼できない語り手が、語られていることを疑わせるものだと思えば、この作品では逆に、フィクションだと分かっているものを現実かもしれないと思わせられる。物語の中で揺れる現実と虚構に、主人公と作者の関係という一段上の視点が加わることで、小説だと理解しているはずなのに、どこか現実を読んでいるような錯覚に陥る。いろいろと考えさせられるのに、最後まで何かが確定するわけではない。このふわふわとした独特な読書体験こそが、本作の魅力だと思う。(千条)

『年貢せめぎ合う江戸時代の領主と百姓』

渡辺尚志 中央公論新社



江戸時代は、
年貢抜きには
語れない

戦国から上納まで、
幕藩体制を支えた租税の全貌
中央公論新社

レトリックとか修辞学とか呼ばれているものにはいろいろ種類があるが、提喻もその一つである。上位概念とその構成要素という対応関係があるときに、構成要素を提示することで上位概念をも表現する。キリストも「人はパンのみにて生きるにあらず」と言っている。年貢も、あるいは提喻の一つであろう。

提喻とは言ったがしかし、本書では一貫して年貢のことが、巨視的にして詳細に記述されている。領主の視点から、村人の視点から、年貢が多様な意味を持つて立ち現れてくる。領主から村に対して年貢が割り当てられ、今度は村の中で村人に対して年貢が割り当てられる。収穫された米は、俵に入れられたり換金されたりして、割り当てと逆の手順で領主の手に届けられる。この一連の流れの中に生じる矛盾が、領主の足かせとなり、村人の負担となり、武士の困窮、村人間の格差の拡大へとつながり、百姓一揆や村方騒動といった形で顕在化、見えるところ見えざるところで江戸幕府の基盤を揺さぶっていく。

年貢を考えるということはそのまま、江戸時代に生きる人々の生活を考えるということである。著者の筆にかかれば、数百年前の文書にその時代を生きる武士や百姓の人柄がにじみ出る。今の我々と変わらぬ人間が、制度を利用し、あるいはその中でもがき、生きている。歴史の研究とは人間の研究ではないか、そう思わせてくれる出色の名著である。(穴党)

『明日も一日きみを見てる』

角田光代
KADOKAWA

「対岸の彼女」などで知られる角田光代さんの飼いかみ猫トトとの日常を主題にしたエッセイ。「今日も一日きみを見てる」の続編にあたるが、勿論「明日も一日きみを見てる」から読んでも問題ないだろう。実際私も前作は読んでいない。私は角田光代さんのファンというわけでもないのだが、可愛すぎる表紙に気付いたらレジに並んでいた。私にとって猫は幸せが具現化したものだ。きつと同じように思う猫好きの方々がいると思う。そんな人にぜひ手に取ってもらいたい一冊である。猫を飼っている人なら共感の嵐だろうし、猫を飼いたい人なら羨望の嵐だろう。角田さんのトトへの愛には、時々「そんなににするほどか？」と思うこともあるが、それは勝手に命を預かった飼い主としての責任などもあるのかもしれない。猫たちは、そんな責任も何も気にせず気ままに暮らしているだけだろうが。そんな気ままさがまた愛おしい。

猫との日常と、その日常の中にある小さな非日常に
思いを馳せる一冊。(薦)



密やかな結晶

小川 洋子

講談社



『密やかな結晶』は、ナチスドイツが生んだ悲しみを記憶の喪失という形で暗喩して、焦点を当てた作品である。

本作は、オルゴールや香水、フェリーなどの生活の一部がみな記憶から喪失していく島の物語である。島では人々が身の回りのものの存在を忘れていく。ただその忘却から逃れることの出来る体質の人間がいるのだ。彼らは、島の過去を記憶する重要な人物である。皆が生活の一部となつていたものとそれにまつわる思い出や感情を忘れていく中で、唯一心にとどめることの出来る存在であつた。しかしそうであるにもかかわらず秘密警察により身柄を拘束され連れ去られる。行動原理のわからない強権の前に、主人公は秘密警察の連行対象である友人を地下室でかくまうという物語である。まさにアンネの日記を連想させるストーリーであつた。

しかし本作は、一般的なディストピア小説とは決定的な違いが存在する。それは暴力性がメインではないという点である。目を覆いたくなるような暴力や、激情のような悲しみは登場しない。物語を構成するのは、小川洋子の静寂を漂わせた文体から紡がれる穏やかな悲哀であつた。一般的に、ナチスドイツの非道な行いを描く際に使われるのは、暴力による苦しみへの共感である。アウシュビッツで瘦せこけた人々や、ガス室に家族を奪われた人に共感することで、ナチスへの悪意を育むのだ。しかし本作ではそういった一次的な恐怖や痛みを強く訴えることはしていない。代わりにみなが順応していく不気味さを描いている。いつもの日常が少しずつ喪失していくことに順応し、理由もなく人々の自由を奪うという圧倒的な不正義にすら順応していく。しかし主人公だけが順応することにかすかに違和感を感じ続けている。身の回りの喪失を当たり前だと捉え、秘密警察を人生の一部として受け入れてしまうという人々の変容の様こそが、最大の不幸であると感じた。

また小川洋子作品の全般の傾向として、悪役の不在という性質があるように思う。しかし本作は、明確に秘密警察という悪が存在するのだ。小川洋子の描く悪から生まれる問いかけに耳を傾け、静謐さをまとった苦しみに思いを馳せてみてはいかがだろうか。(ミジンコ)

ひとこと 編集後記

今年の夏は晴読雨読(溪)

部屋の整理をしていたら、同じ本が2冊出てきた！(塔)

下鴨神社で古本市の神様に会いたい夏だった(わ)
趣味として本が読めるようになった夏(硯)

来月開館する最寄りの新図書館はたぶん神様からの成人祝い(箒)
読んだ本の10倍読みたい本が増える(薦)

キーボードを買う言い訳として、文章を書く(千条)

カンボジアからこんにちは、編集できずすみません
ありがとうございました(想)

受験生のとき読めなかった古典が、
なぜ今こんなにもスラスラ読めるのか(穴党)
不甲斐ない編集長を助けていただき誠にありがとうございます(權)



ひろばの書評は、 駒場書籍部で本と出会います。



駒場書籍部では書評誌ひろばの
棚を常設しています。
紙の本と書評を、併せて手に
取れることを大事にしています。

- ◇『書評誌ひろば』最新号と
最新号に掲載した本
- ◇140字書評で取り上げた本
- ◇ひろばと出版社と一緒に
企画した本



ひろばの活動内容や最新情報はこちら→
<https://www.utcop.or.jp/news/news-350086/>

東京大学書評誌『ひろば』

×

理論社80周年コラボ企画

灰谷健次郎『兎の眼 復刻版』『太陽の子 復刻版』を読む

「このたび縁あって、書評誌『ひろば』と理論社のコラボ企画を行いました。理論社の創業80周年を記念して復刊された灰谷健次郎の不朽の名作、『兎の眼』と『太陽の子』をひろばの会員が読み、書評を執筆しました。書評の抜粋は、帯やPOPにも実際に掲載されました。」

復刊された書籍は、駒場書籍部の入って左手、書評誌ひろばの棚に陳列されている他、各書店でも購入できます。紙面の都合上、ここでは書評の抜粋のみ掲載いたします。書評の全文は、理論社ホームページ(QRコード参照)で読むことができます。(塔)

『太陽の子』

「戦争」と聞いて想起する感情を遥かに超えた深い悲しみがあ
る。(三木)

「沖繩を愛する人々から、すべ
てを受け入れてくれる温かみと、
沖縄と日本の関係への葛藤が感
じられる。(千条)」

「優しい人ほど、つらくて苦し
い。それでも本書は、優しくある
ことの尊さを、生き生きとした
登場人物を通して、気づかせて
くれる。(ヒラノ)」

「傷ついた人の心を支えてきた
のは、今も昔も人間同士のつな
がりだった。この物語は、『ちむ
ぐり』さな人生を、庇いあって生
きてきた人々の存在を、私たち
に思い出させてくれる。(箒)」

『兎の眼』

「どこまでも突き抜けた生命力
が、この作品にはある。(塔)」

「印象的なのは、まっすぐに人
と向き合う子ども、先生、保護者
たちの姿だ。(三木)」

「古さも、危うさも抱えたまま、
この作品は時代を超えて、胸に
深く残る。(千条)」

「生徒だけでない、先生たちの
成長物語として、大団円を迎え
ている。(穴党)」

「小谷先生の奮闘ぶりは、今を
生きる私たちにまで届く特大の
エールだ。(箒)」

「先生と生徒という立場を超え、
人々が共に学ぶ姿がある。
(瑞穂)」



↑書評全文はこちら

